

座談会

Part 2

平成28年10月14日



東日本大震災からの復旧・復興 そして創生へ

いわき市にも甚大な被害をもたらした東日本大震災。

その復旧・復興のためにいわき市議会はどのように取り組み、
今後はどのようなまちづくりを目指していくのか。

復旧・復興の中心メンバーとして活動した各議員にうかがいました。

東日本大震災発災、そのとき

——平成二十三年三月十一日に東日本大震災
が発生しましたが、まずは皆さまのそのときの
ようすからお聞きしたいと思います。

●●●●●●●●●●

蛭田 私は母親と自宅にいたのですが、あまり
の揺れに母親と庭に出ました。その後はすぐに
家族と連絡を取り合うとともに、近所の方々の
安否確認などを行いました。電話が通じず、電
気も止まり、さまざまな情報が飛び交っていて、
地域はまさにパニック状態でした。当時を振り
返ろうとしても、何をどうしていたのかはつき

りとした記憶がなく、そ
れだけ私自身も混乱し
ていたんだと思います。

鈴木 私も、自宅に
いるときに地震が
発生しました。築
四〇年以上の古

い家なので揺れが激
しく、片手でテレビ、片手
で棚を押さえながら、と
にかく地震が収まるの
を祈っていました。その後は、家の中の片付け
をし、家族や近所の方々の安否確認などを行
いました。水や食料の問題もありましたが、最も



困ったのは正確な情報が入ってこないことで、
それが市民の不安をさらに増大させてしまっ
たと思います。

座談会出席者

〈敬称略〉

蛭田 克

◎在任期間：平成12年10月～ 現在
◎主な役職（東日本大震災関連）：
議長、東日本大震災対策本部本部長

根本 茂

◎在任期間：平成12年10月～平成28年9月
◎主な役職（東日本大震災関連）：議長

木田 孝司

◎在任期間：平成12年10月～平成24年9月
◎主な役職（東日本大震災関連）：
東日本大震災復興特別委員会委員長

小野 邦弘

◎在任期間：平成16年10月～ 現在
◎主な役職（東日本大震災関連）：
東日本大震災復興特別委員会委員長、
第2分科会会長、原子力災害対策分科会副会長

磯上 佐太彦

◎在任期間：昭和61年9月～平成3年3月
平成12年10月～ 現在
◎主な役職（東日本大震災関連）：
東日本大震災復興特別委員会委員長

鈴木 利之

◎在任期間：昭和55年10月～平成24年9月
◎主な役職（東日本大震災関連）：
東日本大震災復興特別委員会第1分科会会長

大友 康夫

◎在任期間：平成20年10月～ 現在
◎主な役職（東日本大震災関連）：
東日本大震災復興特別委員会第1分科会副会長

大峯 英之

◎在任期間：平成20年10月～ 現在
◎主な役職（東日本大震災関連）：
東日本大震災復興特別委員会第2分科会副会長

伊藤 浩之

◎在任期間：平成17年9月～ 現在
◎主な役職（東日本大震災関連）：
東日本大震災復興特別委員会第3分科会副会長



小野 邦弘

小野 地震発生時、私は議会棟にいました。妻が豊間保育園の園長をしていたので、市の職員から「連絡してください。」と言われましたが、携帯電話がつかず、市役所前の公衆電話から津波のことを伝えました。しかし、その後は翌朝まで連絡が取れず、一睡もできませんでした。被害の全体像が見えていなかっただけに、

家族全員の顔を見るまでは安心できない状況でした。

伊藤 その時は、重税反対集会が行われていて、「がんばろう」と拳を突き上げているときに地震が発生しました。ものすごい揺れで、立っている人はその場に座ることさえもできない状態でした。外に出たら歩道のタイルがはがれ、道はひび割れており、道路の水面を見ると渦を巻いており、「いったい何が起きているんだ」と驚愕したのを覚えています。

あと数秒逃げ遅れたら

木田 その日は郡山市の知人を訪ねており、その帰りにグラツときて「これは大変だ」とすぐに思いました。ラジオで津波注意報が出ている



木田 孝司

ことを知り、自宅に一人でいた母親の安否確認をしましたが、電話が通じたのはその一回だけでした。国道四九号の崩落はありませんでしたが、延々と渋滞が続いていて、自宅に着くまで三時間もかかりました。
大友 当日は私もいわき市を離れていて、埼玉県内の首都高を車で走っていたときに地震が発

生しました。すぐに首都高を下ろされ、水戸までは約二時間半かかりました。すでに日は落ち、停電で周囲は真っ暗でしたが、勿来のトンネルを抜けたら一変して明るくなりました。東京電力と東北電力の管区のちょうど境界なんです。当然、そのときは福島第一原子力発電所が大変なことになっているとは、想像もしていませんでした。

大峯 地元である豊間地区のあいさつ回りをしているときに地震が発生しました。あまりにも激しい揺れで、瓦は落ちるし、塀は倒れる。腰を抜かして立てない高齢者もいました。私は消防団員もしていたので、海岸部の確認に行き、津波が見えたので慌てて逃げました。あと数秒逃げ遅れていたらどうなっていたか分からない状況でした。

根本 私は津波に飲まれてしまいました。義理の親が久之浜に住んでいて、心配で確認に行ったときに津波が襲ってきました。急いで車に飛



根本 茂

び乗ったものの、津波のスピードは思いのほか速くて、一度は車とともに流されましたが、運良く助かることができました。あの恐怖心は一忘れられませんね。

磯上 自宅にいたときに地震が発生しましたが、被害が少なかったので、震災直後から被災地の現地調査に参加しました。特に、津波に襲われた沿岸部はあまりの惨状で、言葉が出ないほどでした。しかも、原発事故が起こり、市民の方々が大きな不安を抱えていただけに、まずは私たち議員が頑張って復旧・復興を力強く進めていかなければと思いましたね。

特別委員会で対応を強化

蛭田 当時、私は議長を務めており、まずは議員の方々の安否確認を行ったうえで、今後の対応について議会議務局や市執行部と協議しました。その結果、地震による被害で議会棟が使用できなかつたため、開会中の平成二十三年二月定例会の最終日である三月十七日の本会議を、市文化センターで開催いたしました。また、三月二十八日には、全議員を構成員とする「いわき市議会東日本大震災対策本部」を設置し、直ちに国や県、東京電力などへ要望書を提出するための準備を始めました。

六月定例会初日の六月十六日には、活動を発展・強化させるために対策本部を解体し、新

たに「東日本大震災復興特別委員会」を設置しました。その中で特に力を注いだのが、被災者の生活再建支援と原子力災害への対応です。当時は市民生活がまだまだ混乱している状態だったので、いわき市議会が丸となって復興に取り組んでいかなければという使命感が全議員の中にみなぎっていました。

木田 特別委員会の目的は復興へ向けての調査・提言で、私が初代委員長を務めました。課題として掲げたのは、被災者の生活再建支援と居住環境の改善、原子力災害への対応、地場産業の再生と風評被害の払拭で、それに合わせて





三つの分科会を設け、より具体的に取り組むことにしました。

当時はまだ混乱が続いていたので、とにかく活動がたいへんでした。「早く復旧してほしい」など、さまざまな要望や問い合わせが市民からどんどん寄せられました。その一方で、復旧状況や支援物資に関する情報が錯綜している状態でした。そのため、市議会に入ってくる情報

を特別委員会で整理して適切にコントロールするとともに、優先順位をつけて取り組むことにしました。

特に原子力災害については、現場で何が起きているか全く分からない状況だったので、東京電力の関係者を招致して聴取と質疑を行うとともに、現場での確認作業もいち早く行いました。また、双葉郡八町村から約二万四〇〇〇人の人がいわき市内に避難してきていたので、その方々の今後の生活支援も含めて対応策を検討しました。

心のケアも重要な課題

鈴木 私が会長を務めた第一分科会のテーマは、被災者の生活再建支援と居住環境の改善です。その中で心掛けたのが、阪神淡路大震災や新潟県中越地震などの教訓を生かすことで、関係資料を集めたり、勉強会などを行いました。災害関連死についても注目し、心のケアについても積極的に取り組むため、新潟に行つて関係者の話を聞いたりもしました。その結果をいわき市議会として提言することは残念ながら実現できませんでしたが、何らかの形で生かしていきたいと考えています。

大友 第一分科会の副会長として、私も神戸や新潟に行つて仮設住宅などを視察しました。特に高齢者対応についての話を詳しく聞くことが

でき、心のケアの大切さを痛感しました。

また、今回の震災は地震と津波、そして原発事故という複合的な災害で、過去の教訓からだけでは対応できない課題が多かったのも事実です。特に津波被災者と原発事故避難者との生活支援の内容に大きな差があり、その問題についてどう対応していけばいいのかが大きな課題でした。

大峯 第二分科会のテーマは、地場産業の再生と雇用対策です。漁業従事者には東京電力からの補償がありますが、一番心配だったのは漁ができないために後継者が育たないことです。また、市内には多くの水産加工業者がいましたが、そのほとんどがまだに再建できていません。国のさまざまな支援策はあっても、震災ですべての設備を失った生産者が多く、そこに風評被害も加われば再建が難しいのも当然です。そのため、農業も含め、生産者の実情を国や東京電力へ届けることに積極的に取り組みました。



鈴木 利之

伊藤 第三分科会のテーマは、防災のまちづくりと原子力災害対策です。特に放射性物質の拡散によって何が起きているのか全く分からない状況だったので、市民の不安を払拭することに努めました。

実際、原発事故後、多くの人が市内から避難をして、市内を車がほとんど走っていない状況でした。やがて戻ってきた市民に安心して住み続けてもらう必要がありますが、放射性物質に関して、SNSなどのインターネットを通じていたずらに不安をおおる状況があり、その影響もありました。

そこで、まず市に要望したのは、放射性物質の測定体制をしっかりと構築してほしいということです。空間線量はもちろん、食料についても測定し、その内容を市民に広報する体制づくりに取り組みました。その結果、空間線量の計測器を八〇〇台購入し、市民への貸し出しが始まりました。実際にさまざまな測定体制が整った

のは翌年六月ごろでしたが、市民の声を市政に届けるという市議会の役割をしっかりと果たせたのではないかと考えています。

現場主義で具体的に対応

小野 私は二代目の委員長を務め、国や東京電力などとさまざまなやりとりを行いました。その中で強く実感したのが、地元との温度差です。現場はまだまだ復興途上で多くの要望が出ているのに、その切実な状況があまり伝わっていないように感じました。震災直後に比べてマスクも報道も減り、東京からは「復興はもう済んだ」と見えていたようですが、実際は困っている被災者が多く、地場産業の再生も風評被害の払拭もまだまだという状況でした。

また、大熊町の帰還問題もあり、そうした課題にもしっかりと対応していかなければ浜通りの復興はないという危機感がありました。

汚染土壌などの中間貯蔵施設の問題にしても、国が現場の状況を把握して積極的に取り組めばもっと早く進むはずです。いわき市議会としても積極的に要望していかなくてはと考えています。

磯上 私が三代目委員長を務めたのですが、より専門的に活動するために、復興特別委員会では生活再建支援と原子力災害対策の二つのテーマに絞って活動することにしました。原子力災



害対策で特に課題となったのは、やはり中間貯蔵施設の計画が遅々として進まないことです。マスクなどでは地元住民が非協力であるような報道がされましたが、決してそんなことはありません。環境省が地元の意見を聞きながらもっと積極的に対応していれば、状況は確実に進展していたはずですが。

被災者の生活再建もかなり進み、現在では双



伊藤 浩之



葉郡からの避難者といわき市民との共生が課題となってきました。被災者の中にも、原発事故と津波被害の支援に差があることから、複雑な状況が生まれています。新たなコミュニティの形成を図りながら解決していきたいと考えています。

また、災害公営住宅の入居者の中にはひとり暮らしの高齢者が多く、心の問題を含め、さまざまなケアが必要になると考えています。

根本 震災後、県が中通りに復興公営住宅を整備するという記事が新聞に掲載されました。これは浜通りの被災者の気持ちに配慮しておらず、いわき市議会としても県に要望書を提出しました。その結果、いわき市内にも災害公営住宅が整備されるようになりました。

今後、浜通りの被災者の気持ちをどのように発信していくかが大きな課題です。個人的には、将来を担う子どもたちが愛着とプライドを持って育つ環境をつくっていききたいと考えています。将来「ここに住んでいて良かった」と思ってもらうためにはどのように取り組めばいいか。地元の方々とも協議しながら、市議会として積極的に発信していきたいと思っています。

市議会と市は車の両輪

—— 震災から五年が経ち、被災地を取り巻く環境や市民の気持ちも大きく変わってきていると思いますが、いわき市議会としての取り組みを振り返ってみて、どのように感じていますでしょうか。



木田 五年前に比べれば生活環境は確実に良くなっていますが、いわき市はまだまだ復興途



大峯 英之

上だと思えます。それは、現在も「被災者」と呼ばれる方々がたくさんいるからです。被災したすべての人が生活を再建し、笑顔と元気を取り戻さなければ真の復興とは言えないと私は考えています。

大峯 私の地元は津波による被害が大きかった豊間地区で、この五年間、その変化を間近で見ってきました。現在、豊間地区では土地区画整理事業の仮換地が進んでいます。多くの人は「まだ仮換地？」と思われるかもしれませんが、震災直後の惨状を考えると「よくここまで復興できたなあ」というのが正直な感想です。振り返れば、市議会としてやれることがもっとあったようにも思いますが、当時は直面する課題に対応するのが精一杯で、無我夢中で走ってきたという感じが強いですね。

伊藤 震災後の市議会の取り組みを振り返るため、過去の資料を見直してみました。市議会と市執行部は車の両輪とよくたとえられます

が、意見の違いも、議論もありましたけれど、大局的に見ると市議会と市執行部が車の両輪として安心安全な暮らしを取り戻すため全力で活動してきたと改めて感じました。もちろん、すべての課題を解決できたわけではなく、忸怩たる思いもありますが、当時の混乱した状況を考えると、迅速な対応ができたのではないかと個人的には思っています。今後この経験を生かし、より積極的に取り組んでいかなければと考えているところです。

■ 国の対応には不満も

蛭田 東日本大震災は沿岸部だけでなく、いわき市全体に甚大な被害をもたらしました。特にいわき市では四月十一日も大きな地震が起き、擁壁が崩れて人が亡くなっています。地震と津波に原発事故も加わり、まさに未曾有の災禍の中、市民と市職員、そして市議会が一丸となり



蛭田 克

「オールいわき」で復旧・復興に取り組んだことは後世にぜひ伝えていきたいと思っています。私が議長を務めていた二年間だけでも、内閣総理大臣、県知事、全国市議会議長会、いわき市などへの要望書、さらには東京電力に対しても重要な時機を捉えて決議文を提出しています。

ここまで復興できたのは、もちろんいわき市だけの力ではなく、さまざまな支援のおかげだと心より感謝しています。しかし、国の対応には必ずしも満足しているわけではありません。復興を加速化させるため、政策をさらに強化してほしいと考えています。

磯上 国のこれまでの対応は、常に後手後手でした。地震や津波という自然災害は防ぐことはできませんが、原発事故はいわば人災です。国策として進めてきたのに、その対応に腰が引けているのは納得できません。例えば道路の側溝にたまった土でさえも「運ぶ場所がないから」と対応してくれませんでした。そこで、いわき市でやむを得ず対応しようとしたら「費用は負担します」となるわけで、国も東京電力も率先して取り組もうという姿勢ではないことが非常に残念です。中間貯蔵施設の問題についても本腰を入れて取り組んでもらうように強く要望していきたいと思っています。

小野 中間貯蔵施設の土地交渉は環境省だけでは難しいと私は感じています。豊富な経験とノウハウを持つ国土交通省も交えて、明確な期



限を区切って行わないと、いつまで経っても前には進まないのではないのでしょうか。中間貯蔵施設の問題は、今後の復興の大きな障害になる恐れもあるので、私たちもしっかり対応していかなければと考えています。

■ 地域の絆を生かして

鈴木 熊本の地震や岩手の大雨の際にも思いま



したが、過去の教訓が全く生かされていないように思います。体育館や車の中での避難生活をいつまで続けさせるつもりでしょうか。東日本大震災のときと同じ光景が、また繰り返し返されていることが残念です。国や県は被災者の生活支援をもっとスピード感を持って行うべきですよ。

また、家屋の全壊や大規模半壊には国の補償がありますが、半壊や一部損壊には補償がないというのはやはりおかしいですね。大規模半壊と半壊の境界が分かりにくく、このままでは被災者の間に変な軋轢を生むだけだと思います。

過去の震災の教訓をマニュアル化して県や国などと共有するとともに、法的な整備もしっかり行うことが急務ですね。

大友 震災を経験して学んだことは、やはり地域コミュニティの大切さです。どんなに行政の震災対策が進んでも、震災では常に想定外のことが起こるもの。最も頼りになるのは隣近所の支え合いです。そのことは多くの市民も実感していると思います。特にいわき市内には双葉郡八町村から約二万四〇〇〇人の人が避難してきており、新たなコミュニティづくりが大きな課題にもなっています。

伊藤 先日、津波被災者の方からお話を聞く機会がありました。その方は母親と些細なことで喧嘩してしまい、次の日の朝、母が朝に電話で謝った際に「卵焼きを用意しているから家に取りにきて」と言われたそうです。仕事帰りに行こうとしていたところ、地震が発生し、母親は津波の犠牲になりました。後日発見された冷蔵庫を開けたら卵焼きが入っていたそうです。まさに涙なくして聞けない話で、そうした方々の気持ちに寄り添っていくことも私たちの大切な役目だと改めて実感しています。

経済促進が復興の原動力

—— 今後の被災者の生活再建とともに、いわき市の復興を加速化させ、さらに発展させてい

くために必要なことは何でしょうか。



大友 康夫

蛭田 日本は人口減少時代に突入しました。いわき市も一〇年後には人口が三〇万人を切ってしまうと予想されています。しかも、二〇年後、三〇年後には人口が半減するという推計もあるほどです。人口減少を防ぐとともに、復興の原動力となるのは、やはり経済・雇用の促進です。

いわき市は東北有数の工業都市で、小名浜という港湾もあるので、それらの特長を活かして経済・雇用を促進させていくことが重要です。また、子どもを生み育てやすい環境をつくることも大きな課題で、医療・福祉の充実と教育・文化の向上を図り、将来のいわき市のまちづくりを担う人材を育てていきたいと考えています。

根本 浜通り地区の復興を考えると、いわき市が核になって地域をリードしていくことが大切です。特に双葉地区からいわき市へ約二万四〇〇〇人の人が避難しており、原発で働く人も約



磯上 佐太彦

一万人住んでいるといわれています。また、福島から茨城に避難した人もいるので、地域の枠を超えて連携し、課題を共有しながら広域的に取り組んでいくことも必要だと考えています。

磯上 スピード感に対する批判はあるものの、復興は着実に進んでおり、深刻な問題となっているのは風評被害だと思います。空間線量も食品も問題がないのに、未だに払拭することができていません。しかも、風評被害を自分たちでつくっている側面もあると私は考えています。地元の人が地元の魚や野菜を食べないようでは、解決されるはずがありません。まずは地元の人が積極的に食べ、「おいしいよ」と全国に向けて発信すれば、風評被害の問題も徐々に解決していくのではないかと期待しています。

小野 この夏、WBS CのU-15ベースボールワールドカップがいわき市で開催されましたが、今後もそうしたスポーツの国際大会を招致し、「いわき市はこれだけ元気になった」と世界

に向けてアピールしていくことも大切ですね。日本サッカー協会から寄付された人工芝のサッカー場もありますので、子どもたちも安心してプレーができると思います。そうしたスポーツ施設を生かして情報発信と交流人口の拡大を図っていけば、復興も必ず加速化していくはず

小さな声にも耳を傾けて

鈴木 インフラの復旧・復興も重要ですが、市民の心、つまり、人の復興がなければ将来のビジョンも見えてこないと思います。介護保険でいえば、最大の課題は地域包括ケアシステムの構築です。この基本は支え合いのシステムで、重要なのは心のケアです。これからも社会福祉を充実させながら、元気なまちづくりを目指していきたいですね。

大友 私も心の復興には社会福祉の充実が欠かせないと考えています。いわき市も高齢化が進んでおり、認知症対策などが大きな課題となっています。誰もがいつまでも元気に暮らせる福祉環境を築くことは、まちづくりの基本です。「震災があったから実現できなかった」ではなく、「震災の経験があったからこそ実現できた」と言えるように頑張っていきたいと思っています。

伊藤 震災から五年が過ぎ、被災者からの要望も多様化してきており、よりきめ細かな対応が



求められてきています。しかも、大きな声に隠れて表に出てこないものもたくさんあるはずで

す。そうした小さな声にも耳を傾けながら、議会の活動にしっかりと活かしていきたいと考えています。

大峯 復興が進むと、また新たな問題が発生する。それはやむを得ないことであり、逆に言えばそれだけ復興が進んだということです。いわき市でも、これからさまざまな問題が発生してくるでしょう。大切なのは力を合わせて問題解



—— この座談会の内容も、いわき市民が今後の復興を考えるうえで貴重な記録になると思います。本日はありがとうございました。

決に取り組むこと。今後も「オールいわき」で復興を加速化させていきたいと考えています。

木田 私は震災後にいわき市の歴史を調べ、江戸時代に同じ規模の地震があったことを初めて知りました。どんなに重要な記録でも、知る機会がなければ役に立つことはありません。この五〇周年記念誌も同じです。防災情報に関するさまざまなアーカイブ(記録)を知ってもらうにはアクセシビリティ(利用しやすさ)を向上させる必要があります。国・県・市の共通課題として責任を持って取り組んでいかなければならないと考えています。

